No.10／2001.7.1
GRADUATE SCHOOL FOR INTERNATIONAL DEVELOPMENT AND COOPERATION, HIROSHIMA UNIVERSITY
IDEC NEWS LETTER
広島大学大学院国際協力研究科
〒739-8529　広島県東広島市鏡山1-5-1　TEL(0824)24-6905,6906　FAX(0824)24-6904
http://www.idec.hiroshima-u.ac.jp/~info/index-j.html

「フェニックス入試制度」の導入

2001年度学務委員会委員長
教育開発講座　**笠井　達哉**

平成13年度の入試に「フェニックス入試制度」が導入され、IDECでもその一期生を受け入れたことは、皆さんご承知の通りです。この制度の新設に関する諸事情、及び対社会的な意義づけ等については、新聞などのマスメディアを介して皆さんもすでに十分ご承知のことと思います。そこで、ここでは、IDECにおいてこの制度をどのように理解しておくべきかについて、また、この様に入試のやり方やその対象者が、従来とは様変わりしてきた現実について、研究と教育の今後をどのように考え、それを媒介としてどのように学生と接するべきかについての私見を記す。その真意は、入試改革に関する通り一遍の経過と結果を羅列しても、時間と労力の無駄であり、我々が直面するであろう将来の問題点の解決にはならないと考えるからである。すなわち、入試のこの様な変容は、IDECの存亡（特に、応募学生の減少）を左右する重要な問題だと認識し、この問題に関するIDEC構成員からの議論勃発の発端になれば、との意図からである。従って、広報委員会が意図した原稿の依頼とは、食い違った内容になっているであろうことを先にお断りしておく。

「フェニックス入試」の新設が、若年層の入学志願者の減少に代わる入学生の確保、という小手先の目的達成ための対症療法的手段として考え出されたという側面はあるにしても、最大の眼目は高齢（？）でありながらも、未だ消え去らぬ沸々とした知的好奇心を持っている人に、その知的好奇心を満足させる「場」を広く一般社会に提供しようとする大学の意図とその姿勢である。特に、IDECでは、広く海外に向かって「人材」と「情報」の発信源となることを目指している。従って、実社会において様々な修羅場（？）を経験してきた人が、その実体験を自分の言葉で語り、議論する場として広く外に門戸を開き、大勢の方々が入学してくることは、有形・無形に若い院生のみならず、教官にとってもその影響の大きさは計り知れない。すなわち、指導する立場にある我々教官は、確かに、その分野における経験や知識は豊富であるかもしれない。しかし、ただそれだけであり、それ以上の何でもない。たまたま、その分野の知的能力が他の人に比べて少し優れていたお陰で、それが生活の手段（糧）になった結果に過ぎない。この種の能力とは異なるが、それと同等に、あるいはそれ以上に優れた能力を持った人は世の中には数限りなくいる。大学の教官だけが、特別に優れている訳ではない（中には、例外もあるが）。まかり間違えば、机上の空論を振り回し、自己満足のみに生きている特殊な人種に成り下がっているかもしれない。

この観点から、「国際協力」に関するIDECの将来像を模索する時、指導する我々の限界とご都合主義の有無を常に自問自答し、その姿勢を正していくいう度量の多寡に依存することに思い至る。経験豊かで優秀な（高齢であるからと言って全ての入学者がそうとは限らないが）社会人を広く受け入れ、お互いが切磋琢磨する場を創造することが、この打開策の重要な手段と成り得るであろう。具体的には、従来やってきた画一的な選抜方式による入試は廃止し、学生といえども、広く社会に人材を求める方法を取り入れるべきである。特に、教官側の都合（年齢や好み、そして、ある能力の優劣のみ）で入学希望者を篩にかけるような愚行はすべきではない。IDECでは、その多様性を極める努力をしてのみ将来に生き残れる。後発の部局は、この様な努力を傾注して、その独自性を構築してのみ生き残れる。「進化の原理」と同じである。

インドネシア大学との学術交流協定締結の経緯

開発計画講座　山下　彰一

インドネシア大学との大学間学術交流協定は、同大学のブジサントソ学長を広島大学へお迎えし、2001年３月９日に調印式が行われ、締結された。

インドネシア大学は、オランダからの独立直後の1945年につくられた大学とオランダインドネシア市民政庁がつくった大学が1950年に合併してできた。発足当時は，地方にもキャンパスを持ち、その後これらは分離し、今日の地方の有力大学であるバンドン工科大、ハサヌデイン大、ボゴール農科大などになった。

同大学は、学生数が28,000人、教職員数は2,500人である。キャンパスはジャカルタの南、デポックに320haの土地を確保して移転した。ジャカルタには旧３キャンパスが残っており、移転に関しては広大と似たような経緯を辿っている。いずれにしても同大学は有力者、著名人を最も多く輩出しており、同国で最も格の高い大学である。ただ、協定書締結の交渉には長い時間がかかった。私自身は1974年からインドネシア大学を頻繁に訪問してきたが、IDECが設置された1994年に原田前学長のお供をして同大学を訪問、当時副学長であったブジサントソ現学長にお会いし、協定の話が進んだ。実は、同学長は1983年に広島大学医学部に留学した経験があり、協定締結まで時間はかからないだろうと踏んでいた。

ところが、それから７年かかってしまった。理由は、インドネシア大学の同国内における「格の高さ」だった。当時、同大学が外国の大学と協定を結ぶためには「閣議」の了承が必要であった。これを待つ間に４、５年がすぐ経った。そのうちに通貨危機が起き、大学には独立採算が求められるようになり、「対外交流自由化の時代」が到来した。かくして広島大学との協定締結が実現したのである。（この春広島経済大学へ転出した澤滋久氏のサポートに感謝する。）

シリーズ国際機関⑦

国連訓練調査研究所（UNITAR）

広島県総務企画部秘書広報総室国際企画室
西澤真理子

UNITARは、1965年に設立された国連の機関で、訓練や調査を通じた国際社会の平和と安全の維持や経済・社会開発の促進を目的としています。ジュネーブに本部を置き、ニューヨークにオフィスがあって、50人近いスタッフにより各種事業が行われています。近年は訓練に重点が置かれ、開発途上国を中心に、国連加盟各国の外交官や行政官などに対して実施する研修プログラムやセミナーの数は、年間130種類以上にのぼっています。

UNITARと広島県は、現在アジア・太平洋地域の新たな拠点として、広島にセンターを設置できないか検討しています。そのため平成13年度及び14年度には、本県の特長や地域特性を活かした共同研修プログラム等を実施して、「UNITAR広島センター」の有用性と実現可能性を調査することにしています。

この調査には、いくつか課題があります。大学や国際関係機関等と連携しながら、いかに意義のあるプログラム内容にしていくか、将来的にセンターをどのように運営していくのか、プログラムを継続するための財源はどうするかなどです。これらの課題を解決しながら、「UNITAR広島センター」の実現を目指します。

今年度、広島では２つのプロジェクトを予定しています。１つは、10月初旬「世界遺産の管理と保全」をテーマとしたワークショップで、これには、アジア・太平洋諸国の行政官等約40名が参加する予定です。また、来年２月頃には環境をテーマとした国際シンポジウムの開催などを考えており、これらの準備期間中、UNITARの職員が広島に駐在します。その際、大学院生の皆様にはインターンとして一緒に活躍していただく機会が提供されます。国際機関でのインターンシップは、国際協力に興味をお持ちの皆様にとって得がたい経験になると思います。夏頃には募集が行われると思いますので、関心のある方は是非応募してください。

連絡先：
広島県総務企画部国際企画室（担当：西澤）
〒730－8511　広島市中区基町10－52
TEL：(082)228－3046
FAX：(082)228－1614
E-mail: m-nishizawa81348@pref.hiroshima.jp
UNITARのホームページ：
http://www.unitar.org/

IDEC アジアセミナー要旨

The 65th IDEC Seminar

Speaker: Prof. Masaaki Satake (Shikoku Gakuin University)
Theme: Filipino-Japanese Intermarriages in Japan: Social, Cultural analysis of Expectation, Contradiction, and Transformation
Date: 15:00-16:30, February 9, 2001
Moderator: Masatsugu Matsuo

In the mid 1990s, marriages between Japanese men and Filipino women suddenly increased and became one of the most frequent patterns of international marriages in Japan. In each year during this period, some 6,000 Japanese men and Filipino women were married on the average. Based on his fieldwork, especially in Higashi Iya, a mountain village in Tokushima Prefecture, Professor Satake detailed the couples' expectations and, frictions, frustrations and even failures due to social, cultural, racial and gender differences and barriers. But he concluded by showing a sign of hope for better understanding and for gender fair relationships between the couples themselves and between them and the society surrounding them. (Reporter: Masatsugu Matsuo)

The 66th IDEC Seminar

Speaker: Prof. Ceferino P. Maala (Visiting Professor, IDEC, Hiroshima University; Professor, College of Veterinary Medicine, University of the Philippines Los Banos)
Theme: The Role of the Buffalo (Carabao) in Rural Development in Asia
Date: 16:00-17:30, March 21, 2001
Moderator: Toshihiko Nakao

The buffalo is the most important economic animal in Asia. It is the chief source of farm power for Village in rural areas. In addition, it provides manure for fertilization, income during crop failures, and meat and milk and dairy products. Its population has been declining due partly to poor reproduction and high rate of slaughter. Thorough understandings of the reproductive physiology are needed to improve the reproductive performance in the buffalo
. (Reporter: Toshihiko Nakao)

The 67th IDEC Seminar

講師：北村隆則（JICA企画・評価部長）
演題：JICAの国際協力事業をめぐる最近の動向と評価
日時：2001年５月21日16：30－18：00
世話人：中山修一

北村氏は、外務省経済協力局に勤務の後、JICAへ転出し、企画・評価部長を務めている。講演では、JICAの実施する国際協力事業の最近の動向、とりわけ、日本の援助の課題について、援助予算と途上国ニーズの整合性、途上国での実施集団（機関）の必要能力。特にソフト分野へのシフトに伴うJICAの実施体制の未整備、援助手法の未確立等、があることを指摘された。講演後には聴衆との活発な質議があり、北村氏もそのセンスの鋭さに感動された。出席者約50名。（記録：中山修一）

The 68th IDEC Seminar

Speaker: Prof. Abdul Halim (Visiting Professor, Centre for Southeast Asian Studies, Kyoto University; Professor, Bangladesh Agricultural University)
Theme: Historical Development of Agricultural Extension Education in Bangladesh and its Impact in Agricultural Productivity
Date: 16:45-18:15, June 1, 2001
Moderator: Hajime Kumagai, Nobukazu Nakagoshi

Prof. Halim has 33 year's domestic and international experience in teaching, research, training, field extension work and rural development activities. In the seminar he mentioned the history of agricultural extension, role of extension activity, performance of the field extension workers and role of organizational management, and emphasized how the extension activity improved agricultural productivity. Comparison of extension activity between developing and developed countries, especially Bangladesh and in Japan was made. The seminar was a collaboration with Environmental Science Seminar, Faculty of Integrated Arts and Sciences and held in the faculty. (Reporter: Hajime Kumagai)

シリーズ研究室紹介⑦
ー 交通工学研究室 ー

開発計画講座　杉恵 頼寧・藤原 章正・岡村 敏之

本研究室は、杉恵頼寧教授／藤原章正助教授／岡村敏之助手と12人の学生（うち留学生３名、博士課程後期２名）で構成されている。

本研究室の研究テーマは、交通計画の策定に必要となる技術の開発と、それらの技術をベースとした交通現象の分析である。研究の主要な柱は、１）交通を利用する人々の行動や産業活動の調査手法やデータ収集方法（活動日誌調査票の設計、情報技術を用いた行動軌跡データの収集等）、２）それらのデータを用いた分析手法（交通需要予測手法の開発・改良）、３）政策の社会的実験やシミュレーション手法の開発であり、いずれも、将来の交通へのニーズを定量化し、交通施設やサービスの評価を行うために不可欠な技術である。

現在、先進国での交通計画への要請は、交通需要マネジメント(TDM)／高度交通情報システム(ITS)／持続的開発などに移りつつある。このような交通計画へのニーズの多様化と、人々の嗜好の多様化に対応して、交通計画やその分析手法にも多様化・精緻化が求められている。一方、アジアをはじめとする地域の途上国の大都市においては、都市への人口集中などによる交通混雑や環境問題の軽減が大きな課題である。それらに応じて本研究室の研究対象は幅広い。例えば、交通機関・施設（道路、鉄道、バス、航空…）、交通特性（都市内、都市間、中山間地域…）、交通目的（通勤、買物、観光…）、地域（日本、アジア…）、移動者属性（高齢者、移動制約者…）、主体（政府、交通事業者、利用者、沿線住民…）などである。さらに、杉恵はミャンマーの都市公共交通プロジェクトの計画に参画し、また藤原はフィリピンの交通研究交流プロジェクトに参画するなど、アジア諸国との関係も深めつつある。

学生の教育においては、国内外での各種学会・シンポジウム等への出席、および学会発表や論文投稿を強く奨励（前期課程も１年間で１人１回以上を目標）しサポートするとともに、アジア諸国の都市交通調査を毎年実施するなど、学生にとっては「忙しいがオトクな研究室」となっている。

バングラデシュにおける留学生活

教育文化専攻・博士課程後期　小野　理恵

私は、現在バングラデシュのダッカ大学博士課程に所属し、博士論文のための資料収集と聞き取り調査を中心に留学生活をおくっています。現地調査をもとに農村金融（貸し借りや貯蓄）の役割や機能を地域の生産・消費のあり方や人間関係から明らかにしようと試みています。５、６年前から、首都のダッカから船で半日ぐらい離れた村で、世帯構成や職業、収入、貸し借りや貯蓄に関して調査を行っています。

はじめの頃は、調査票をいかに消化するかという事に追われ、調査に対する気負いとあせり、意図が思うように伝わらないという苛立ちから、多くの失敗をしました。あまりの畳み掛けるような質問に聞き取りの最中に相手が逃げて行ったり、お祈りの時間に調査を行って相手を困らせたり、金貸しの人に追い返されたり、調査項目の意図が伝わらずアシスタントの人と口論となったりしました。今はといいますと、（迷惑をかけていることには変わりはありませんが、）調査項目に沿ったかたちでなくとも、雑談や井戸端会議（噂話？）からもいろいろな生活全般に関する問題や貸し借り・貯蓄の方法について学んでいます。

貸し借りや貯蓄に関しての質問は非常に私的な問題で、また質問時間も２時間３時間に及びます。しかし、みな私の学業のためと辛抱強く答えてくれます（私も質問攻めにあうこともありますが、）。また、自分らは普段、口にしないお茶やビスケット、バナナなどでもてなしてくれます。別れ際の「またおいで」という言葉はなによりも私を元気づけてくれます。これまで調査や研究が続けてこられたのは、村の人々のおかげです。日本人の所得水準からすれば貧しいと思われるかもしれませんが、日本にはない生活のゆとりやおもしろさがバングラデシュにはあります。素直で、少しおせっかいなバングラデシュの人々が彼ららしい発展を遂げてくれることをこころから願っています。また、残りの留学生活からより多くのことを学べるようこころにアンテナを張り巡らせていきたいと思います。

芸予地震による本研究科の被害状況

2001年３月24日午後３時28分に発生した芸予地震では、本研究科も多大な被害を被りました。

本研究科の物的被害は、建物への亀裂、居室の天井に取り付けてある換気扇カバーの落下、書架の転倒、図書ならびに物品の散乱などでした。

幸いなことに、本研究科における人的被害はありませんでした。

研究室における被害状況の一例

修了生の進路

2001年３月　博士課程後期
開発科学専攻４名（内留学生３名），
教育文化専攻１名修了
教育・公務　２名
民間企業　１名
進　学　０名
帰　国　１名（インドネシア）
そ の 他　１名

2001年３月　博士課程前期
開発科学専攻37名（内留学生14名）
教育文化専攻35名（内留学生12名）修了
教育・公務　６名
民間企業　28名
進　学　14名
帰　国　13名
（マレーシア３，中国４，ボリビア１，インドネシア２，ブルネイ１，ウクライナ１，韓国１）
就職活動中　４名
研 究 生　１名
そ の 他　６名

客員教授・客員研究員の紹介

［客員教授（外国人研究員）］

氏　　名：黄　一
（Huang Yi）
出　身　国：中国
出身国での所属：大連理工大学・教授
研 究 題 目：船舶・海洋構造物における腐食と防食に関する研究
滞 在 期 間：平成13年４月１日～平成13年９月30日

氏　　名：Tan, Merle Custodio
（タン，マーレ　クストディオ）
出　身　国：フィリピン
出身国での所属：フィリピン大学・サイエンス・エデュケーション・スペシャリスト

研 究 題 目：化学的視点からの日本・フィリピン両国の環境教育の比較考察
滞 在 期 間：平成13年４月１日～平成13年９月30日

［外国人客員研究員］

氏　　名：李　进
（Li Jin）
出　身　国：中国
出身国での所属：中国吉林省延吉市人民政府文化体育局・体育運動推進部長
研 究 題 目：スポーツ科学と脳科学の接点に関する研究
滞 在 期 間：平成13年４月１日～平成14年３月31日

氏　　名：徐　恵卿
（Suh Hye Kyung）
出　身　国：韓国
出身国での所属：全州大学校師範大学家政教育科・教授
研 究 題 目：日本中国地方の儀礼飲食に関する研究
滞 在 期 間：平成13年４月１日～平成14年３月31日

氏　　名：劉　世龍
（Liu Shi-Long）
出　身　国：中国
出身国での所属：「成都晩報」「重慶晩報」特約通信員
研 究 題 目：東北アジア産業化の歴史的特質に関する研究－比較史・交流史の視点から－
滞 在 期 間：平成13年４月１日～平成14年３月31日

氏　　名：ファズルル　ラフマン
（Fazal-ur-Rahman）
出　身　国：パキスタン
出身国での所属：戦略研究所・主任研究員
研 究 題 目：日本と南アジア地域協力連合：その短・中期的協力の展望
滞 在 期 間：平成13年５月25日～平成13年８月24日

スタッフの人事異動

■転　出　等■

[教　　官]

H13.3.31　辞　職　澤　滋久　助　手
（広島経済大学講師へ）

H13.3.31　辞　職　木本浩一　助　手
（広島女学院大学助教授へ）

[事　務　官]

H13.4.1　配 置 換　久保　力　総務係長
（工学部へ）

H13.4.1　配 置 換　進賀修治　総務主任
（経理部へ）

H13.4.1　配 置 換　大谷浩一　学生係
（教育学部へ）

■転　入　等■

[教　　官]

H13.7.1　採　用　馬場卓也　助　手

[事　務　官]

H13.4.1　配置換　荒川和義　総務係長
（医学部より）

H13.4.1　配置換　中田尚宏　総務係
（経理部より）

H13.4.1　配置換　島田文隆　学生主任
（教育学部より）

■昇　任　等■

[教　　官]

H13.4.1　昇　任　石田三樹　教　授

H13.4.1　昇　任　吉田　修　教　授

新任スタッフの紹介

［教　　官］

馬場　卓也
教育文化専攻・教育開発講座・助手
2001年広島大学大学院国際協力研究科
博士課程後期退学
修士（教育学）
大阪府出身

［事　務　官］

荒川　和義　総務係長
昭和40年採用（庶務部）
平成12年より医学部医事課

中田　尚宏　総務係
平成３年採用（教育学部）
平成11年より経理部契約課

島田　文隆　学生主任
昭和48年採用（広島商船高等専門学校）
平成８年より教育学部

カレンダー
〈2001年7月～2001年12月〉

７月10日	修士・博士論文提出締切
７月27日	教授会
８月１日	修士論文発表会
９月６日	平成13年度第１回総合試験 博士課程前期　入試（～７日）
９月７日	教授会
９月13日	平成13年度第１回総合試験　合格発表 博士課程前期入試　合格発表
９月21日	教授会
10月４日	入学式（10月入学）
10月19日	教授会
11月30日	教授会
12月21日	教授会

IDEC 研究棟を正面より臨む